

2020年に入つてから

の新型コロナウイルス(COVID-19)の世界的な感染拡大は、これまで我々が常識としていたグローバル経済、すなわちヒト・モノ・カネの地球規模の自由な移動が当たり前と考えていた世界を一変させてしまった。

世界的に競争力のある供給主体によって部品調達から生産・物流・小売りまでつないでいくグローバル

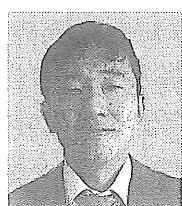
## グローバル経済はどうなったのか

・サプライチェーンを構築することが、優秀なグローバル企業のビジネスモデルであった。しかし昨今の新型コロナ禍の状況では、グローバルなヒトの移動が感染拡大のリスクであり、各國での経済活動の自粛が続く中ではグローバルなモノ

愛知淑徳大学  
ビジネス学部准教授

## 渡邊 聰

わたなべ・さとし 環境・資源経済学。名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。1979年生まれ。



# コロナ後の世界と循環型経済

（グローバル経済）のなかで、各国は効率的に経済成長を達成し、世界経済は成長し続けるというビジョンであった。新型コロナ後の経済を考えた場合、グローバル経済というビジョンは終わってしまったのだろうか。

一つの答えとして、グローバル経済による経済成長を実現しながら、今回の新規プロジェクトとして、南アフリカ共和国ダーバン市の下水処理場をフィールドに、微細藻類の培養と回収、それから抽出したバイオ燃料の生産、さらには藻の残渣を肥料用マットへ加工し有機農業へ活用するという研究プロジェクトに参画している。

そのなかで、革新的な技術をビジネスモデルとしてパリリスクに対応できるような経済の姿をめざすべきだ。グローバル経済は経済的な利益を世界規模でもたらすが、同時にグローバルリスクに伴う多様な不利益も世界規模で、しかも高速に伝播する。したがって、新型コロナ後の世界経済はこのよのびグローバルリスクに柔軟に対応しうるレジリエンス（頑健性）を有した経済システムのあり方を考える必要がある。

そのようなコロナ後の世界経済のあり方の一つとして、サーキュラーエコノミー（循環経済）がある。サーキュラーエコノミーは、

の移動を限定せざるを得ず、同時にカネの移動の滞留をもたらしかねない。伝統的な経済学が描いてきたのは、比較優位に基づく地球規模での経済取引を基礎にした経済システム

筆者は、2019年10月29日付の本欄でも紹介した、JST・JICAの共同プロジェクトであるSA-TREPS（地球規模課題）代表＝神田英輝・名古屋大学大学院助教）として、南アフリカ共和国ダーバン市の下水処理場をフィールドに、微細藻類の培養と回収、それから抽出したバイオ燃料の生産、さらには藻の残渣を肥料用マットへ加工し有機農業へ活用するという研究プロジェクトに参画している。

型コロナ禍のよのびグローバルリスクに対応できるような経済の姿をめざすべきだ。グローバル経済は経済的な利益を世界規模でもたらすが、同時にグローバルリスクに伴う多様な不利益も世界規模で、しかも高速に伝播する。したがって、新型コロナ後の世界経済はこのよのびグローバルリスクに柔軟に対応しうるレジリエンス（頑健性）を有した経済システムのあり方を考える必要がある。

そのようなコロナ後の世界経済のあり方の一つとして、「持続可能な地域社会」を構築していくよのびビジネスに取り組む必要がある。